

君塚正義さんを偲ぶ

神谷一夫

までお付合がおよんでいた。

宇都宮大学の君塚正義さんが、一月七日急逝された。六四才であった。八月に入院され、肺の腫瘍の治療をうけているが、元氣でがんばっているというお葉書を頂き、安堵していたので、こんなに早く逝かれるとは思ってもいなかつた。

君塚さんとのお付合いは、私が東京教育大農村経済学科に入学して以来で、三〇年以上になる。君塚さんは、当時農村社会学の研究をされ、林教授のもとにおられた。昭和三〇年代の農村社会は、産業化の中で急激な変化を示して来ており、君塚さんは、千葉県の農家の御出身ということもあって、農村調査はお手のものであった。特に、調査においては、その地方の方言を素早くマスターし、方言を使つて農家の人々に話しかけ、親しくなつてから調査をはじめられていた。その地方の言葉を使うということは、君塚さんにとって、単なる調査のテクニックではなく、その地方の言葉を用いなければ本当の調査が出来ないという信念があつたからであろうし、農家の人達と本当に親しくなり、農家の人達の気持を理解したいという君塚さんのやさしい人柄から出たものであつた。農村調査が終つたあとにも、農家の人々との交際は続けておられ、農家の人達が上京した折には、君塚さんのお宅に泊めておられた。したがつて、君塚さんと農家の人達との交流は、調査の度に広まり、広まるだけでなく、深まり、冠婚葬祭にて行きたい。

君塚さんが生活研究をはじめられたのは、昭和四〇年に盛岡にある東北農業試験場の農家生活研究室長になられてからである。当時は、農業は増産時代であり、生活研究も経営研究に対する力の入れ方ではめざましいものがあった。研究面においては、水田地帯の農家調査を生産、生活両面から行ない、しかも、それを二年間継続して行い、水田地帯農家の生活を浮き彫りにした。また、生活普及員の方々との研究上の交流の場を作る必要があるとして、各県の生活普及員や県農試經營部の研究員の方々の御協力のもとに、生活研究会の東北支部の設立をはかり、昭和四八年九月に第一回の東北支部研究会を青森県で開催し、成功している。この東北支部生活研究会はその後毎年続けられ、今年で一六回の研究会を開くまでになつてゐる。

君塚さんは、律儀で、誠実な方であり、また、どの様な人も差別せず受け入れられておられたから、大学時代には学生から親しまれ、また、農家の人々の間においても人望があり頼られていた。今、あまりに突然で、あまりに早急な逝去に、心痛むと同時に、無念さ、残念さを感じる。生活研究の中心者として活躍されて来られただけに、我々生活研究者の心の中にぽつかりと穴があいた様な気持である。

農村の良き伝統と誠実な農民を愛して来た君塚さんの御冥福を祈ると同時に、生活研究に携わる者として、行き先不透明な今日の農業、農村社会の中にいくらかでも光をもとめて、農村生活研究を深めて行きたい。

(東北農試)